北海道平和セミナー

アイヌ問題を考えた

法学部４年
本田　真優子

「差別」は最も愚かな罪

寂しい伝統文化の衰退

国際交流センター主催の「北海道平和セミナー」が、８月２日から５日にかけて「アイヌ問題から見る世界の少数民族問題」というテーマで行われた。学生約五十人がこのツアーに参加し、そのうち約半数は留学生であった。

ところで、『ノンノ』というファッション雑誌は誰もがその名を知っていても、「ノンノ」がアイヌ語で「花」を意味することを知っている人は少ない。

札幌の街は、ちょうどお祭りの最中だった。大通公園にはビアガーデンが立ち並び、夜にもなればたくさんの人でにぎわっていた。しかし、いくら札幌の街が栄えていても、車で三十分も走れば、たくさんの緑を見ることができ、時にはキタキツネなどの野生動物にも会えるそうである。こんなにも自然豊かな北海道で数日間を過ごせると思うと、私はとても幸せだ。

８月３日、私たちは白老にあるアイヌ村、ポロトコタンを訪れた。「コタン」とはアイヌ語で村、「ポロ」とは大きい、「ト」は沼や湖といった意味である。その名の通り、大きな湖のほとりに、その村はあった。門をくぐると、巨大な村長の像の出迎えを受けた。そして、チセ（家）で、アイヌの文化についての話を聞いた。

例えば、アイヌの女の子は、十二歳ぐらいになると、口の周りなどに入れ墨を彫る。長い時間をかけて完成させていくわけだが、入れ墨を彫り終えるころには二十歳くらいになっており、完成すると結婚や儀式への参加が許される。つまり、一人前の女として認められるというわけだ（もちろん、現在では行われていない）。

アイヌの扮装で（右が筆者）

こんな話を、アイヌの民族衣装を身につけた男の人が、冗談まじりで面白おかしく説明してくれた。その後、「ムックリの演奏」や「ピリカのうた」という伴奏のない歌を聴き、そしてクマ祭りの際、クマが迷うことなく無事に天国へ行けますように、という願いを込めて踊られる「イオマンテリムセ」を見た。

ところで、アイヌの民族衣装に織り込まれているあの独特の模様は、悪魔をにらみつける目を表していて、病気除け、魔除けといった意味があるそうで、こうしたものまで、私たちの目には、神秘な雰囲気に思えた。

アイヌの伝統的な文化を見たり聞いたりできたことは、大変興味深いものであった。しかし、私が期待していたよりも、「観光用に作られた村」というイメージが強く、アイヌの人々の実際の生活などについては、あまり詳しく知ることができなかったのが少し残念だった。

その帰り、私たちは昭和新山と洞

爺湖を訪れた。展望台から見る昭和新山は、野生的なオレンジ色の肌を見せ、モクモクと蒸気を噴き出していて、まさに圧巻と言うべきものであった。昭和新山も、洞爺湖も、北海道の自然の豊かさ、雄大さを十分見せつけてくれたような気がした。

8月4日には、アイヌの方々をお招きして講演会が行われた。講師は、北海道ウタリ協会札幌支部長の澤井アク先生である。

澤井先生は、アイヌの歴史や、差別などについて分かりやすく説明してくださった。

例えば、「差別は、いじめ」という形となって学校の中において最も激しく現れる。従って、アイヌの子供たちは自分からアイヌであると名乗りたがらない。また、学校内での差別は、進学率にも影響している。高校においては進学率よりも退学率の方が高いそうだ。差別は、子供たちの教育への権利をも奪っているのである。

だが、このような差別は初めから存在していたわけではない。倭人もアイヌの人々に「シサム（よき隣人）」と呼ばれていた時期もあった。しかし、倭人地が広がるにつれ、倭人たちは関所を設け、天皇の治める朝廷国家にアイヌを入れようとはしなかったのである。このあたりから、アイヌに対する差別、圧政が始まったのであろう。「同じ人間なのだから、どこにでも住めるのは当たり前なのに、敵だからといって追い出したり、自分の領土だからと言って中に入れようともしないとは」という澤井先生の言葉が心に残った。

差別とは、人間が犯した最も大きく、愚かな罪の一つであると私は思う。民族や種族が違うからといって、なぜお互いに憎みあったり、不平等が生まれなければならないのだろうか。私たちは、差別のない平和な世界を作るために、一人ひとりが深く考えなければならない。

また、澤井先生をはじめ、他のアイヌの方々も憂慮しておられたのは、アイヌ文化、とくにアイヌ語の衰退であった。アイヌは文字を持たないため、言葉は口伝えによって伝えられてきた。しかし、一八七一年明治政府によりアイヌ語が禁止され、それ以降アイヌ語を話せる人は激減し、現在では数えるほどしかいないのである。どこに国においても、伝統的な文化が失われていくのは寂しいものである。

彼らに「シサム」と呼ばれる努力を

アイヌの文化、言語を復興させるため、例えば中国のチベット自治区のようなコミュニティーを作ろうという案も政府から出ているようだ。失いかけたものを元に戻すには長い年月がかかる。「だが、完全に失われたわけではない」と、アイヌの方々も希望を持っておられた。

私はこのセミナーに参加して、いかに自分がアイヌについて無知であったかを思い知らされた。彼らに対する差別や圧政について、「知らない」ではすまされないことを実感した。「民族は違っても同じ国に一緒に暮らしているのだから、お互いに理解しあわなければ」という、留学生の言葉がとても印象的だった。私たちは、アイヌの人たちから、もう一度「シサム」と呼ばれるよう努力しなければならないと思う。

澤井先生の話を聞くセミナー生